

「ラブラドル・レトリバー はどんな犬なのか—その起源と 一般的形態と気質について」

木村 龍司

(1) 起源

残念ながら、管見によれば、ラブラドル・レトリバーの確かな起源は断定し得ないというのが現状である。

この犬種の祖先については、先学たちによっていくつかの説がたてられている。けれどもこれが絶対だというものがなく、いずれも推論の部分を含んでいるのである。

したがって、ここでも、そうではなかろうかと思われる二、三の説を紹介することにとどめ、諸氏の今後の研究に待つことにしたい。

その一つは、カナダのラブラドル半島を原産とする説である、ラブラドル半島というのは世界地図を拡げて見るとカナダ北東部の大きな半島であるが、その沿岸で漁業を営んでいた漁夫たちが飼っていた犬たちがおり、この犬たちは水を恐れず、寒さにも強く、作業をも好んだので、漁夫たちは海中に流した網を探させたり、網から逃げ落ちた魚を捕えさせたりしていたが、その犬たちが、祖先であるとする説である。名前からすると、レトリバーは運び屋さんであるから、ラブラドル半島の運び屋とは、いかにも妥当な説のようにも思えるものである。もう1つは、そのラブラドル半島の、大西洋側、イギリスに近い所にニューファンドランド島という島があり、そこには今も、モロシヤ犬の系統を引く、セントバーナード級の極大型犬で、海難救助犬としても、知られるニューファンドランド犬がいるが、このチベタン・マスチフを祖先と言われる犬の血を、ラブラドル・レトリバーは引いているのではないかとする説である。現在のニューファンドランド犬は、ラブラドル・レトリバーよりはずっと大型だが、毛は平らに全身を覆い、上毛は硬質で脂肪分の多い直毛で、下毛は柔毛が密生してよく水をはじくといった点も、ラブラドル・レトリバーに似ていなくはない。しかし、記録によるとこの犬は、16世紀の初めには見られなかったそうで、イギリスやフランスに、この犬が知られたのは19世紀になってからだそうであるから、これも定かではない。

ラブラドル半島の漁夫の犬たちと、ニューファンドランド犬の祖先に当たる犬たちとの関係もはっきりしないが、ラブラドル半島とニューファンドランド島は、ベルアイル海峡をはさんで、近い距離に位置しているところから見れば、どちらもそうは異なるものではなかったのかも知れない。Anna Katherine Nicholasの本によれば、Peter Hawker なる陸軍大佐が1814年に「全ての銃猟に最高で、一般には黒色の、ポインターよりは小型の、とても美しい足を持った直毛で、尾を巻かず、非常に速く走り、泳ぐ犬がいて、その犬はニューファンドランドの『セントジョンの犬』と呼ばれている。」と記述しているそうである。

セントジョンズという地名は、今もニューファンドランド島の東端に残っているが、どうやらこの辺りにやって来た水鳥猟好きのイギリス人たちがこの犬たちを発見し、1820～30年頃イギリスに連れて帰って、水鳥猟に使うのに、より具合が良いように改良を加えたい。Malmesbury 卿などという貴族たちが、その改良に特に熱心であったそうである。その後、名前は省略するが多くの貴族たちが改良繁殖を続け1878年に独立した犬種としてイギリスで犬籍簿が作られ、1904年には犬種標準が制定され新犬種として認定されている。

英・米などの諸文献を漁ると、もっともその間の事情が詳しく述べられているのであるが、今はこの位をご紹介しますにとどめたい。いずれにしても、カナダ北東部の海辺地域に19世紀初頭に生息していた、猟に使えるような犬たちをイギリス人が自国に連れて来て、都合のよいように創り上げたのがラブラドル・レトリバーということになるようである。

そして、現在ではアメリカ・オーストラリアにも広く分布し愛されているが、犬種標準ではアメリカのものが一番大型になっているようである。

(2) 形態と気質

犬種が固定された犬には、その標準となる形態が制定されており、当然、わがラブラドル・レトリバーにもそれがあるので、以下それを記すが、あらかじめお断りしておくのは、それはあくまでも標準であるということである。

標準の形態が定められているのだから、それに合到していることが望ましいのはあたりまえだが、困ったことに自称愛犬家の中には、このような標準を知ると、少しでもそこから外れている犬を見て糞味噌に言う人がいること

である。言われる犬が他人の飼犬ならまだいい、その飼主が本当の愛犬家なら「うちの子一番可愛いな!」と思っているはずだから、もの知りの顔の自称愛犬家が「うちの子」をなんとかせなそうと、悪口を言う相手に腹立たしい思いをしこそすれ「うちの子」に対する愛情に変化が起きようはずはないからである。もし、「うちの子」が標準からどこか外れていたとしたら、そして、その愛犬に邪険な態度が取れるとしたら、その飼主こそ人間の標準から外れていることを知るべきであろう。人間の中にもデブもいればヤセもいる、ノッポもいればチビもいる、さいずち頭も絶壁頭もいるのである。胸の大きな女性が好みならそれでもいいし、小さく可憐なのが好みならこれまた結構ではないか、たとえどこかが気に入らなくとも、他の多くの点に卓越したものを見出したからこそ貴方は恋人を得たのであろうから。恋人が完全無欠だと信じている幸せな方にはごめんなさい。だが、お相手は貴方をどう思って・・・話が脱線した。

ところで、犬の場合には、不尊な言い方をすれば、その犬種はわれわれ人間が創ったものであるということだ。わがラブラドル・レトリバーの場合も例外ではなく、一説によれば、イギリスにこの犬種の祖先を連れ帰った貴族たちは、ポインターやブルドックの血までも混血させることによって、獲物である水鳥を水辺の茂みから持ち帰るのに都合のよいように、体重の軽減をはかったり、被毛を短くしたといわれている様に、犬が好んでそうしたのではなく、人間が強制的に手を加えたことは事実であろう。痩せて種だけの原バナナが、現在のような美味なバナナに改良されたことには素直に拍手が贈れても、染色体を自由に操作しようという現代の改革には空恐ろしさを感じるのだが、いかがなものであろうか。驚いたことには、今でも19世紀のイギリス貴族的な考え方を平気でする人が、中にはいることである。一例を挙げれば、筆者の所へラブラドルと四国犬とを交配して、猪狩りに使う犬を造って見たいから牝の仔犬を譲って欲しいと言って来た人がいた。これなどは確かに「猪狩り」という目的からすれば改良?になるのかも知れないが、筆者は素直に同調しかねる話である。

現代は犬たちが自力で生きて行ける時代ではない。この世に生を受けた仔犬たちは人間に頼ってだけ生きることが可能な時代である。そんな世の中に自分勝手な目的のためにだけ創りだされた仔犬たちはどうなるのであろうか。それが、その目論見通りに猪狩りなら猪狩りに適合していればまだよいの

だが、その確率は極めて低いとすれば、人間によって作為的に混血させられた仔犬たちの運命は悲惨なものとなろう。

以上は極端な例だが、ラブラドル・レトリバーを愛する者としては、その繁殖に際して十二分に考えなければならない重大な問題を含んでいると思う。筆者はナチスのごとく純血だけが至上であると主張するものではないが、あえて現在のラブラドル・レトリバーを改良の名のもとに手を加えることには反対である。今、われわれの手にしている愛すべきラブラドル・レトリバーは、他の総ての犬たちと較べて、何の非難されるべき欠点も持っていないのである。

だが、同一の種類ではあっても、ラブラドル・レトリバーにも固体差は大きい。ラブラドルであれば皆同じというわけにはいかないのである。人間が彼らの結婚から種の繁栄までを司っているのが現状であれば、われわれは、彼らラブラドル・レトリバーの特質を、その長所を、より発展させるような繁殖を、そして、飼育をかんがえなければならない義務があろう。しかし、残念ながら現実には、ラブラドル・レトリバーが一般にはまだよく知られていないことにつけ込んで、目先の営利だけを目的に、あるいは無知から、欠点を多く持った犬による繁殖や飼育がおこなわれてもいる様である。人間の世界とは違って、犬の世界では「鶯が鷹を生む」こともなければ、山中鹿之介のように「七難八苦」に鍛えられたがっている犬はいないのである。彼らはもっと純粹であって、良い種を与えられれば良い仔を産み、良い環境を与えられればより良い気質を現わす。目先の利益のためにするのであれば言語道断だが、少なくとも無知によってだけは、貧相で、ゆがめられた気質のラブラドル・レトリバーを創造してしまわないために、前置きが長くなったが、現在の一般的なラブラドル・レトリバーの標準形態と気質とを記しておこうと思う。

イ 形態

○頭部 頭蓋は幅が広く、平滑でたるみがなく、ストップははっきりしている。頬は肉が薄いがよくしまっていて、しわはない。鼻梁は、真っすぐで、吻は長い。大きくて鼻孔のよく開いた鼻をもっているため、先端はとがらず、角張って太く、愛嬌のある上唇がたれ下がつて、下唇を覆っている。顎は力強くしっかりしている。歯は鋏状咬合で、大きくて強い。

○目 中位の大きさ（2.5～3cm）で两眼の間隔は5cm位。色は茶褐色・

褐色または黒色である。目差しは優しく、落ち着きと知性と思慮深さを示し、表情豊かである。

○耳 頭部のやや後方、頭蓋より少し低い所に付き、頭部に接して垂れている。肉はさほど厚くなく、大きさは頭部に均り合った適度の大きさ（長さ10～12cm、巾7～9cm位）でよく動いて表情を表わす。

○首 中位の長さで、たくましく力強いがスマートである。

○肩 後方に向かってほどよく傾斜している。

○胸 幅広く、厚い。深さは適度にあって肋骨はたくましく張っている。

○前肢 真っすぐで、骨格は後肢より太目だが、すっきりとまとまっている。狼爪がある。くるぶしから下の部分は緊握して丸く、先はべたんとしておらず、指先はきれいにそろっており、肉厚で強い足の裏は均整のとれた形をしている。指の間の水かきも密生した被毛に覆われている。

○腰 幅広く筋肉がよく発達して、がっしりとまとまって力強く、適度の丸みをもって尾に続いている。

○尾 ラブラドル・レトリバーの大きな特徴の一つで、「かわうその尾っぽ」と言われるように、根もとは非常に太いかまぼこ状で、先端は、細い極端な先細りの独特な形をしている。長さは中位で、飾り毛はなく、短毛が豊かに全体を被っている。喜怒哀楽を表現して上下左右に活発に動かすが、上方で丸めることはない。

○後肢 堅固な腰に続いて筋肉に富み、膝部の曲がり具合は美しく、飛筋のカーブは浅い。狼爪はなく、くるぶしから下の足先は前肢同様である。

○被毛 上毛は短毛で密生している。触った感じはミンクの手ざわりの様になんかなりしっかりとした堅さを感じさせる直毛で、栄養状態と手入れさえよければ艶やかな光沢をもっている。冬期には、ふわふわで柔らかな、防水性の高い綿状の下毛が全身に密生する。

○毛色 黒色・チョコレート色・黄色の3種類がある。単色だが黄色のものには淡い色合いのものから、濃いものまで、ホットケーキがその焼具合によって色が変わるように多彩である。胸の中央に小さな白い斑が、あたかもワンポイント模様の刺しゅうをしたように、あるものもいてこれはいいのだが、他の部分に斑点があったり、ぶちがあるものはいない。

黒色と黄色の交配は、よく行なわれるが仔犬は黒色か黄色の単色のものが産まれ、まだらやぶちは産まれないのが正常である。遺伝的には黒色の方が

黄色に対して優性だから、仔犬を産ませようとする時には両親の色の血統をたどって、よく考えた上で交配させる必要がある。

○大きさ 一般的な犬の大きさの概念からすると中型犬に属することになる。雄の方が雌よりも一回り大きく、

体高 雄 56 cm～63 cm

雌 54 cm～60 cm

体重 雄 30 kg～35 kg

雌 25 kg～32 kg

程度が標準とされるが、ラブラドル・レトリバーがよく普及しているイギリスとアメリカではサイズの好みが違うせい、イギリスの上限は体高で2・3 cm上の標準より小さい。

以上の各部分の形態を総合して言えば、堅固で力強く、まとまった体格の中型犬がラブラドル・レトリバーということになる。艶やかで防水性が高く濃密で実用的な被毛を持っはいるが、華やかな飾り毛は一本もなく、人の目をひくきらびやかな派手さのない、優しさと知性と愛らしさをたたえた表情の、静かで素朴な風格を示す一方、野武士の様なたくましさをも外観として合わせ持った犬である。

ロ 気質

強健な身体に恵まれて、病気にかかることも少ないせい、大らかで穏和な気質をしている。

充分なカロリーの食事と、快適な生活環境と、飼主の愛情とを与えられることによって、ラブラドル・レトリバーの、この極めてのびやかな気質は増々その秀れた面を発揮する。

一日中、鎖につながっぱなしにされていたり、狭い小屋に押込められたり、運動不足になっていたり、よほど精神的なストレスがたまっていたりしない限り、たとえ二日や三日飼主が散歩に連れ出すことをサボった後でも、ラブラドル・レトリバーの、大らかで穏和な気質に変化をきたすことはない。例えば、広い川原や山野で彼らを自由に放ったとしても、彼らはある種の犬たちがする様に、一目散にどこかへ駆け出して、飼主がいくら呼んでも手許に戻ろうとはしないなどということはないし、他の犬が近づいても無駄にはえたり追いかけたりすることもない。水が大好きなラブラドルのことだから、海辺や川原で放たれば大喜びで水中に飛び込んでしまうことは

あっても、常に飼主の意志に注意を怠ることはなく、もっと泳いでもいい？とか、もっとあっちへ行ってもいい？とかの了解を目で求めてくるはずである。飼主が散歩なら散歩の時のルールを作ってやれば、融通はいくらでもきくくせに、一面では極めて習慣性の強いラブラドール・レトリバーはそのルールから逸脱することを好まない。いつも速足で行く所は速足で、右へ曲がる角では右へ曲がっていいかどうかを飼主に確かめ、一時停止の道路横断では停止する。他の犬とすれ違う際にも、こちらから喧嘩をしかけることはまずない、放していても、ジョギングで駆け足をしている人の後を追ってはえついたり、小さな子供にとびかかったりすることもない。これらは、いずれも特別なトレーニングを経て彼らが身につけるものではない。飼主が愛情をもって接し、教えてやりさえすればラブラドール・レトリバーは、こちらが驚くほどの速さであらゆることを理解する頭の良さを持っている。ただし、頭が良く物覚えが良いだけに、一度不意に襲って来て嫌な思いをさせられたことのある犬だとか、悪さをした子供だとかに対しては、こちらがおどろくほどその記憶を消し去ろうとはしないので注意を要する。そんな時でも、極めて忍耐強い彼らは自分から仕かけて行くことはなく、出来れば無視して通り過ぎようとするのだが、背中を逆立てるので、飼主がなだめてやった方がよい様だ。それ以外では人間が犬を散歩に連れて行くという感じではなく、人間の方が楽に散歩をさせてもらっているという感じて、ラブラドール・レトリバーとの毎日の散歩が楽しめるはずである。

人間のそばに居ることが何より大好きなのがラブラドール・レトリバーであるから、できるだけ長い時間を彼らと共に過ごしてやるのが、彼らの気質の良さをより良く発揮させることにつながる様である。といっても飼主の方も忙しいから、いつも遊んでやっている訳にはとてもいかない。犬が好きだけれど、せいぜい散歩の時位しか犬とつき合ってやれないという方が、ラブラドール・レトリバーを飼おうというときには、最非、家の中で飼うことをお勧めする。多少家の中は汚れるし、用便の後で足を拭いてやらなければならないなどの面倒はあるが、特にとり合ってやらなくてもラブラドール・レトリバーは人間たちの会話を聞き、態度を観察し、臭覚を働かせて、全身で人間たちの胸中を推察することに努め、特に仔犬の時には驚くほどの速さで人間の言葉を理解する様になるからである。そうすると、短い散歩の時間の中でも、言葉で教える種々なトレーニングが楽に出来るのである。

家の中で飼われている犬の方が、屋外の犬舎で飼われている犬よりも、訓練成果が著しいことは、プロの訓練士さんも認めているところである。ラブラドル・レトリバーを家の中と言うと、あんな大きな犬をと思われる様だが、実際に共同生活をして見ると、大きな彼らはその大きさの故に邪魔になることはほとんどない。むしろ、小型犬を家の中で飼うよりはよほど楽な気がする。ラブラドル・レトリバーは、ある種の小型犬がする様に、せかせかと家中をとび廻り、家人の足許にまとわり付くといった落着きのなさは示さない。仔犬から成長期にかけてのラブラドル・レトリバーはいたずらの天才だから、その間は人間の目がとどかない時のためにサークルを用意するなどの注意が必要だが、その期間を過ぎると、ラブラドル・レトリバーは全くいたずらをしなくなる。仔犬の時にはスリッパをかみつぶし、くつしたを持ち逃げし、大切な本を破って喜んでいても、やがて書棚から勝手に本を引き出してはいけないことを知り、用便は一日のだいたい決まった時間に、行きたくなれば呼びに来るようになるし、床に置いたコーヒーカップやレコードは、注意深く避けて通るようになる。家人が机に向かって入れば、いつの間にか足許に身を寄せている。邪魔をするにしても、床にひっくり返って音楽を聴いていると、暇なら遊んでよと言わんばかりの顔をして太腹や下腹など、柔らかそうな所にそっと自分のあごを乗せて来る程度である。家に闯入りて来る者でもない限り、むだに鳴き立てることもなく、それぞれの家庭の中によく溶け込んで、家族の一員となること請け合いである。また、何か仕事を頼まれるのが大好きなこの犬は「誰かさんを起こして来て」などと頼まれ様ものなら、いそいそとすっ飛んで行き、目覚時計では役に立たない寝ぼすけさんを、ニコニコ顔で寝床から引っぱり出す特技も持っている。ラブラドル・レトリバーは3ヶ月位になれば人間の思うことを驚くほど理解するようになるし、6ヶ月位になれば身体も強くなるから、もし本格的な訓練を望むならこの頃から始めることも可能である。しかし、特に訓練所などに預けて淋しい思いをさせ、大金をかけて訓練をしなくても、家庭犬としてなら、忍耐強く、忠実で素直で愛情細やかなこの犬の性格は、飼主が充分自分で引き出し、育ててやれる犬種である。とにかく間の抜けた人間様を相手にするよりは、よほど楽に気持ちのやりとりが出来る、信頼感の置ける気質の犬である。

参考文献

- Anna Katherine Nicholas 「THE BOOK OF THE LABRADOR RETRIEVER」
- William W. Moulton and R. Annabel Rathman 「The Labrador Retriever」
- DIANE MCCARTHY 「LABRADOR RETRIEVERS」
- 「LABRADOR RETRIEVER CLUB YEAR BOOK」
- 「アサヒペット百科」朝日新聞舎